



一貫したコンセプトゆえの理想に近づく大きな飛躍

多くのクルマにフロッティング大画面の恩恵をもたらしてきたストラダFシリーズは、2016年の登場以降、数多くの進化を果たしてきた。反面、「コンセプトは一貫して変わらない」「当初より重視していることが3点あります。一つ目は取り付け性で、二つ目は大画面ならではの見やすさ、三つ目がデザイン性です。」

コンセプトを維持しつつ、2020年モデルとして検討された新たなテーマが「有機EL」の採用だった。「コンセプトにも、とても相性がいちいんです。どれも向上させる可能性がある。9割方の国産車に取り付けられる本体サイズは変えないまま、実は画面も大きくなっているんですね。前のモデルはジャスト10インチなんですけど、今回は10.1インチ。狭額縁にして画面をさらに大きくしつつ、元々コントラスト比が高いので視野角が広くなり、さらに見やすくなっています。フロッティング感がより出る方向ですね。」

機能面のみならず、美観の面でも有



スペシャル・インタビュー

その時、
何があったのか？

傑作品 プロデュースの 舞台裏



その年におけるカー用品の象徴も言えるのが年末に誌上発表している「カーグッズ・オブ・ザ・イヤー」。専門誌として日々登場する製品を追い続けるなかこれぞと思う一品をその年に選ぶ創刊以来の恒例企画だ。選出イヤーは2020年とはいえ、その先進性と登場意義は今後のカー用品界においても見るべき点は多い。

年末から年始号へと3号連続で展開する特別企画も今回でファイナル。作り手、送り手となった受賞製品の代表者に特別インタビューし傑作リリースの背景を知ること、カー用品の「今」を紐解いてみよう。

カーグッズの未来に
先鞭をつける
キーマンに訊く。



※インタビュー取材にあたり、写真撮影時のみマスクを外してご対応頂きました

非常に薄くでき、デザイン性をさらに高めることができます。今のモデルに高めることができます。今のモデルに高めることができます。今のモデルに高めることができます。

「以前のモデルから、プリリアントブラックビジョンを使ってきました。これは光の反射を抑え、黒の再現力をコントラスト比が高い有機ELとの組み合わせで、さらに視認性が高まっています。直射日光が強い車内環境でも黒が引き締まった美しい映像を楽しんでいただきたいです。」

機ELにはアドバンテージがあった。「有機EL採用でディスプレイを」

「我々が想定する利用シーンに耐えるかどうかは大事なことです。有機ELは熱に対してシビアな面もあります。今までの構造では耐えられないことが途中でわかったので大幅な設計変更も行いました。むしろフロッティング構造だからこそ実現できたとも言えます。」

全面的に刷新されている。焼き付きやすい特性の対策はもろろん、液晶向けの絵作りとは、コントラストなどの面で相容れない部分も多いからだ。「気づかない程度に微妙に絵柄を動かすなどの対策もしています。メカに詳しい方は「ホントに焼き付きは大丈夫か?」と思われるかもしれませんが、その点もどうぞご安心下さい。」

ハナソニック株式会社
オートモティブ部
ストラダ
商品企画担当
久米俊裕氏



選出理由

有機ELパネルの採用に始まり車内映像空間を飛躍させる

受賞製品 MEMO 車内モニターの大画面化を広く浸透させたDAYNABIGスイングディスプレイに、有機ELモデルを追加。ストラダ史上最高となる漆黒の黒色を獲得し、精緻な色再現性も確立。視野角も広がり、車内という限られた空間での見やすさにも優れる。